

欲生心の象徴的自覚

6

本多弘之

bonda hiroyuki

浄土教を成り立たせる宗教関心を、「願生浄土」という言葉で表す。この「浄土」への意欲を、教えを説き表す仏陀の側から衆生に語りかけるかたちで『大無量寿経』の物語が生まれている。物語の主人公「法蔵菩薩」が、一切衆生を平等に救い上げたいという願を、師・世自在王仏の前で自己吟味して志願を表白する。その願心を「本願」と言う。その本願が、十方の衆生に対して「我が国に生まれ

んと欲え」と呼びかける。その「欲生」（生まれんと欲え）を自己に聞き当てた親鸞は、欲生心を「勅命」であると言うのである。しかしその「欲生」は、深く衆生の意識の深層に秘められた本来的存在へ回帰せよとの「命法」である。その深層の意欲の存在に衆生を自覚めさせるために、まずは衆生が自分で「発願」するがごとくに教え、さらに「回向」（他力を意識しつつ、それを自分の現世

の罪福に振り向け、役立たせようとすることをくぐって、「至心・信樂・欲生」の信心にまで歩まされるのだ、と十方衆生に呼びかける三願（第十八、十九、二十願）を立体的に了解された。その三願の自覚的転回を、往生の歩みとして「双樹林下往生」「難思往生」を通じて「難思議往生」を「意欲」するまで、信念が歩むのであると、親鸞は本願の命法を受け止めたのである。この「往生」の自覚的



転回は、本願に依る信念の「回入・転入」であると見られ、真宗の教義学では三願転入と呼ばれている。この三願にわたって衆生を回入・転入させるものが、大悲の「勅命」なのである。この勅命によって、衆生は自己の本来的存在を回復するまで、往生の歩みを「意欲」していくのである。

浄土教では、衆生の深層意識の宗教的要求を、意識表面の自覚にまで呼び起こすために、このように法蔵願心の物語を通して「本願他力」からのほたらきを教えているのである。この本願の物語が、衆生の深層意識の「欲生」を自覚化させるための必須の契機が、「報土」なのである。「報」とは因位の願が修行をして成就するという物語に依じて、阿弥陀の浄土が本願に「酬報」する場所であるという意味である。実体的な対象の世界として実在する世界ではなく、欲生心と呼び起こす象徴的世界なのである。

『浄土論』の莊嚴功德は、阿弥陀の浄土の相を二十九種のかたちで語っているが、これを天親は「願心莊嚴」と言う。これを親鸞は「光闡横超大誓願」と「正信偈」天親章に押さえている。浄土のかたちたる莊嚴功德は、法蔵菩薩の本願力を象徴的に表現し光闡するものであるということである。誓願を言葉によって公開し鮮明にするかたちが浄土の莊嚴であるということである。

これが「横超の大誓願」のかたちであるということ、少し考察したい。「悲願」という言葉は、衆生の生活において、いかに要求が深くとも、あるいはいかにそれを求めても得られないという悲しみが深くとも、これを「満足」させずにはおかない、ということを表している。われわれのこの世での生活の場は、煩惱と罪業とによって動かされている。五濁悪世と言われる歴史的社会的現実である。この現実の場を厭い捨てて、理想の場に生まれ直したいという厭離穢土の意欲は、聖道門を支える縦型の菩提心であると親鸞は言う。先に述べた「至心発願欲生」の意欲において要求される往生、すなわち双樹林下往生とは、この世に死んで、別の世に生まれ変わる往生、これは「往生」と言うが、いまだ本願力が呼びかける報土の往生ではなく、人間の理想がこの世に死んでのみ満たされるとい、人間の自力の自己矛盾が破れる意味の往生なのだ、ということである。

これをいかに本願の救済に転換するか。そこに、大悲が横さまにはたらく菩提心であるということ、これを言うのである。これは自力でしか物事が考えられないときには、考えにくいから「難思議」だとされる。われらの思議を超えているのである。思議を超えて、絶対の満足を開くために、本願が選ぶ名号の功德力は「破闇満願」であると言われる。「破闇

とは、無明の黒闇を破ることを言う。つまり、人間の意識に煩惱が覆って起こる発想のありかたを「覆蓋」と言うが、この覆われている立場を出ることができないことを「黒闇」と言うのである。これを自ら自力で破りうるという発想を、豎に発起する菩提心であると言う。ところが、本願力は名号を選択して、この仏の名の功德力によって、「破闇満願」を具体化しようとする。これは縦型の発想になじむ衆生には、誠にうなずきにくい。

有限有漏の衆生は、ほとんど無能無知なるにもかかわらず、あくなき縦型思考で衆生の苦惱状況を自己変革しようと思いつける。これが、三大阿僧祇劫をかけてでも成就せずには止まないという縦型の菩提心となる。この妄念を根底から破って、大悲願心の広大性に目覚めさせようとするのが、法蔵菩薩の横超の大弘誓なのである。これに出遇うとき、有限のこの世を横さまに超える方向が開かれる。たすからない身が、そのままたすけられるという。それを善導が「衆生貪瞋煩惱中能生清浄願往生心」と表した。その「願往生心」の意欲を発起する源の本願に返して、濁世のただなかに、「能生清浄願心」が発起して、横超の菩提心たる眞実信心となると、親鸞は表現されるのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)